絵本をもとにした子どもとの対話的表現活動の実践
～絵本『へんしんへんしんフルーツポンチ』の世界を楽しむ～

九州大谷短期大学幼児教育学科2年
矢ヶ部礼姫・末岡優佳・中島風花・
田邊万音佳・久冨真緒・吉田彩乃
宮﨑未夢・熊川美麗・執行梨沙

題材とした絵本
『へんしんへんしんフルーツポンチ』
作: 山本祐司　　出版：ほるぷ出版　（第1刷）

タイトル：
「へんしんへんしんフルーツポンチ」

実践準備の担当：プロデューサー（末岡優佳）、脚本（田邊万音佳）衣装（宮崎未夢・矢ヶ部礼姫・中島風花）、振り付け（吉田彩乃）、音楽（久富真緒）、会計（執行梨沙）、記録・報告書（熊川美麗）

実践時の担当：ＯＰのお姉さん（宮崎未夢・久富真緒）、パネルシアター（矢ヶ部礼姫・中島風花）、博士（熊川美麗）、助手（末岡優佳・吉田彩乃）、ナレーション（田邊万音佳・執行梨沙）、音・演奏（吉田彩乃・久富真緒）、カメラ・音響（末岡優佳・久富真緒・宮崎未夢）

1. 題材「へんしんへんしんフルーツポンチ」選定の理由

遊びの展開の要素が多くすることを目標に考えたからである。大きく4つの理由がある。
1つ目は、絵本の特徴として大きい個体のフルーツからカットされてフルーツポンチになっていくという話の中で遊び(フルーツになりきって体を動かすなど)として展開できる要素が多くあり、子どもたちが主体的になって楽しめると考えた。
2つ目は、絵本の内容が果物からカットされてフルーツポンチになっていくという点で、その当時は実際に作ることで子どもたちがフルーツの変化を感じ取ることができ、食育にも繋げられると考えた。
3つ目は、子どもたちがフルーツになりきることで劇場をただ見るだけではなく主体的に楽しめる考えた。
4つ目は、対象児が縦割りだったためみんなが分かるフルーツというテーマが幅広く楽しめると考えた。

（執筆者：執行梨沙）

2.絵本の世界から遊びへの展開

今回絵本『へんしんへんしんフルーツポンチ』を使用し、題材に展開できる遊びとして考えたものが2つある。1つ目はフルーツの影を利用したシークレットクイズやミックスジュースの手遊びを使用し、導入として子どものコミュニケーションを取りながら遊べることを考えた。

2つ目はパネルシアターを通して子どもたちが積極的に参加できるフルーツになりきる機会を作り、身体を動かし遊ぶことを考えた。

絵本の内容として、フルーツ達は大きすぎてボウルに入らないことから切って形を変えてからフルーツポンチになるという話だったため、子どもたちにもフルーツを学びながら遊んで欲しいと考えた。

まず1つ目のシークレットクイズでは、導入を意識して楽しめることを考えた。会話ができるからこそ、クイズを始めにすることで子どもたちの興味を持てるようにし、フルーツについての話が始まることを遊びを通して伝えることを考えた。話の最後に、1つ目で使用したシークレットクイズに基づきフルーツの知識を伝えようと考えた。お姉さんが博士で登場、子どもたちが興味を持てるようにして自分がフルーツになりきった遊びの中から『そうなんだ』と楽しめるよう考えた。手遊びではフルーツを使用することを最優先で考えた。2回手遊びをすることではじめは曲が分からなかった子でも楽しそうなところだけでも参加して一緒に遊べるように考えた。

次に2つ目の最初に考えた遊びの工夫は、自分たちがフルーツになりきるため子どもたちにもフルーツのお面（被り物）を作ることだった。その際の気づきとしては、フルーツが固定になってしまうことと安全性、どのように使うのかなど考え直さなければならないことが多くあった。また、その場では人数も分からないため量の目安も立てられず作成に踏み込めなかった。今回子ども達が自分のなりたいフルーツになることを中心に考えていたためお面でのフルーツの指定があることに気づき、今回の劇場では使用しなかった。

その後、お面無しでのフルーツになりきる方法を考え、リボンでの変身が良いのではないかと行き着いた。リボンでの悩んだ点は色と種類だった。お面の時同様にリボンの色ではフルーツの指定を意識してしまうため、なかなか決定ができずに日が過ぎていた。話し合いを続けていく度に、たくさんの色が入ったひとつのリボンを使うことがいいのではないかという意見が出た。カラフルなリボンを使うことで指定されず子ども達が自由にフルーツになりきれると思ったため、リボンでの変身が最終的な答えとなった。

また、話の中盤にはボウルの登場シーンがあり、この場面ではどのようにボウルを表現するのか話し合いが重ねられた。最終的に出た答えは、安全なロープにスズランテープを貼り付け大きなボウルを作ることだった。フルーツになりきりながら入ることが出来ることを考えた上で安全性を考え、なりきりを楽しみながらその場でボウルが現れ、遊びながら楽しめる環境ができるようにした。

（執筆者：矢ヶ部礼姫）

3.実践に際して大切にしたこと

今回の絵本の内容は、フルーツについての題材だった為、まず第一にフルーツに興味を持ってほしいと考えた。その為に、絵本の世界に入り込めるように子どもたちにフルーツになりきってもらったりした。フルーツの絵をただ書くのではなくフルーツ自体に顔を描いたりして子どもたちが絵を見て楽しめるようにフルーツに興味を持てるように工夫した。フルーツが喋ったり、フルーツ博士が出てくる様々なことで楽しんでほしいと感じた。

フルーツが喋ったりする時には、子どもたちに「僕はどう切ったらいいかな？」など投げかけて、子どもたちと積極的にコミュニケーションを取ることで子どもたちが自分の意見を言う機会を設けてみた。「こうすると良いと思う」など沢山のことを言ってくれて子どもたちとコミュニケーションを沢山取ることができて、私たち自身もとても楽しむことができた。フルーツの種類によって話す声やスピードを変えたりして子どもたちが楽しめるようにもした。フルーツに書かれている顔や雰囲気に合わせて話してみたりもした。
フルーツ博士が出てきた時には、子どもたちにフルーツの栄養について知ってもらいたいためにただフルーツの栄養について教えるのではなく子どもたちが楽しめるようにイラストを作ってみたり、博士という人物に興味を持たせてみたりなどした。子どもたち自身もとても楽しそうに言葉かけに答えてくれたり、子どもたちが知っている知識をとても嬉しそうに教えてくれたりしてとても嬉しかった。子どもたちの楽しむ姿が見れて良かった。
全体の流れを通して、子どもたちがフルーツに興味を持ってくれたと感じることができた。また、私たちが「好きなフルーツはなにかな？」など声かけをすると元気よく答えてくれたりして、子ども1人ひとりとコミュニケーションを取ることができたのではないかと感じた。フルーツについて少しでも知識が身につき、興味を持ってくれていたら嬉しいなと感じた。子どもたちに投げかける言葉が届かなかったりして現地の先生方や保育者に助けてもらうことが沢山だったが楽しく終えることができてよかった。学びが沢山の経験でとても良い経験になった。次に活かしていきたい。

(執筆者：吉田彩乃)

4.内容について

（1） 全体の構成

私達の星縦割りチームは、チーム内で３つに人数を分けた。1つ目は、劇が始まる前の準備時間から話の中心内容に入る前の導入を担当した。2つ目は、話の中心内容・次に結びつくような前振りを担当した。3つ目は、話の中を元にまた一変した内容を担当した。

３つに分かれる事で、大まかに説明をするとバラバラになっているようだが、話の元である『フルーツ』は一連の流れで出てくるようになっている。

では、全体の構成を踏まえて最終的に実践したプロットについて説明する。

まず、1つ目は画面上に子どもが登場したらすぐに声を掛けて、子ども達の住んでいる環境気温や子どもの好きなフルーツを聞くなどのコミュニケーションを取っていた。オンラインで人とやり取りをする事は子ども達の経験の中でも滅多に無い為、子どもの緊張をほぐす事・しっかり子どもの声は届いている事を伝えるという意味を込めて実践した。オープニングは、フルーツのシークレットクイズと手遊びを行った。その場で聞いている子どもたち全員が答えられるようなシークレットクイズは、3つ目に出てくる栄養素を伝えるコーナーに繋げれるように同じフルーツを使った。手遊びでは、手を沢山動かして同じ事を多く繰り返す手遊びを選択した。同じ事を多く繰り返す手遊びには、慣れないうちはゆっくり手遊びをして、慣れたら早くして楽しめ、話の導入に出来るものを厳選した。

次に、2つ目は1つ目で出てきたお姉さんが映っている画面から切り替え、パネルシアターに変える事で「何だろう」と疑問を持つ事が出来る状態を作った。つまり、子どもを惹きつけるのに良いタイミング・画面内容にした。語り手が、ただ内容を読むだけでは内容に入り込めず飽きてしまうと考えた。その為、語り手を2人にして本当にやり取りをしているように見せる事、ペーパーのフルーツ一つ一つに違う声色・人をあててより内容に入り込みやすいように意識した。ペーパーのフルーツに声をあてるときに、声と一緒に動きをつける事で、どのフルーツが話しているのかを明確にして、私達がフルーツになりきる事を大切に

ストーリーを進めた。子どもが玩具で遊ぶ時、玩具に生命を吹き込んだかのような遊び方をしている所を私達も真似てフルーツ一つ一つを紹介した。ここで1番大切にしている事は、子どもとやり取りをしながらストーリーを進めていく事である。一方的に話を進めても、画面だからこそ絵本と同じように見られる可能性があった為、子どもが大きな声で自分の意見や案を主張し、どんな反応をしながら応えてくれているのかをストーリーを進める中で見れるようにした。絵本は子どもがどんなに意見を言っても内容は変わらないからこそ、しっかり子どもの意見は画面に映っている人に繋がっていることを子ども達に届けた。

　そして、3つ目は1つ目と2つ目が様々なフルーツを登場させ、フルーツポンチを作るというストーリーの番外編のような、まとめでありプラスアルファの内容にした。子ども達が2つ目の話の中で食べたフルーツでどのような栄養素があるのかをフルーツ博士に聞くという内容である。フルーツは家庭ではなかなか食べれなくとも、給食で出てきそうな、且つ子ども全員が食べたことのありそうなフルーツ5つを選び、そのフルーツを食べると身体にどのような力が付くのかを子どもと学んだ。子どもは初めて聞くことを保護者やお友達に伝える事がある為、すぐ実践出来るような内容にした。

　以上のように、その一つ一つのチームで大切にして内容を進める中でのポイントを元に考えた。また、話があまりバラバラにならないように繋ぎ目を特に意識して全員で構成した。

（執筆者：末岡優佳）

（2）　子どもたちとの対話について

今回コロナウイルス対策としてオンライン上での対話となり、顔がしっかりと見れない中での発表となったが、やはり子どもと対面していないので、しっかりと意思疎通できなかったり、対面だと「こうやってね」とできない子にも声をかけれるが、リモートなので時差があったり注目を引けなかったり、自分たちの理想とは少し離れてしまった部分もあった。

なので、第一回目のプレの時に反省をし、声に表現を入れ小声で言ったり語尾をあげたり声掛けの際は最初に。。「○○園のみんなはどう思う？」と直接問いかけるような工夫をした。

　すると、相手の園の子どもたちも自分たちに問いかけられていると意識して、言葉を返してくれるようになった。一回目と二回目両方とも少人数だったため子どもたちと会話することは難しくなかった。だが午睡の後だったため、子どもたちのモチベーションを保つためにはその時の環境や状況理解も必要となってくると痛感した。
　画面に注目を引いてもらうため子どもたちの集中力を絶やさないために、動く時は画面を切りかえて一緒に動いたり、座って欲しい時はフルーツの声を1つずつ変えたりと変化があるように座って見れるようにという工夫を入れた。
やはりそういう工夫を入れると子どもたちも座って聞いてくれたり集中力を絶やさずに切り替えることが出来た。
　私たちは保育者であるということを意識しながら絵本の読み聞かせでもつかう相手が惹き付けられるような落ち着いたしゃべりをしたり本の内容はとても元気なので明るく声のトーンを上げて盛り上がるような喋りを意識した。
　また、本番の対話は私ともう一人で行った。第1回は手遊びのナレーションと内容のナレーションとわけて話していたが、内容の方を1人で行うと子どもの答えに臨機応変に答えられなかったり答えを拾えなかったりスムーズに行かなかったため、2人でナレーションをして上手く切り替えられるように台本を作り何回声を拾うなど書いてスムーズに行くようにした。
すると、時間をきっちりとできスムーズに行うことが出来た。
　だが途中で言葉が足りなかったり子どもの変化球な反応に対して対応ができなかったり練習より早口になってしまい直が早く終わったりしてしまった部分が反省点だとおもう。向こうの園に吉柳先生が居てくれたため子どもへのフォローを入れて頂いたり反応を拾って頂いた為子どもと対話を絶やさず行うことができたと思う。
子どもと対話をするということは画面では全て伝わらない、温度が伝わらないなど様々なことがわかったため対話や対面ということは子どもと関わる上でとても大切な事だと気が付くことが出来た。

（執筆者：田邊万音佳）

（3）表現の工夫

　私たちのグループはパネルシアターで行ったため、初めはパネルのみを画面に写して撮影し、ナレーションを入れて行っていたが、リハーサルで行った際、パネルのみで行うと画面が変わらず音声のみなので、子どもたちの集中力が持たないと考え、自分たちも画面に映りながらパネルシアターを行う事にした。
　また、導入の手遊びでは、初めはゆっくり真似をして手遊びをしてもらい、慣れてきたら２回目は少しスピードを早めて行ったり、楽しめる工夫をした。導入を1カメで撮っている間に、2カメでパネルシアターの準備をし、スムーズに切り替えができるようにした。
　内容に入り、フルーツ達が声を出すシーンがあり、同じ人が声を出すようになっているが、声のトーンを変えてそれぞれのフルーツのイメージに合わせた声で話したりすることで、子どもたちもフルーツがイメージしやすかったのではないかと思う。フルーツが大きくてそのままのサイズではお皿に入らないので、みんなでおまじないをかけて小さくするという内容で、おまじないをかけるとき、ウィンドチャイムを使いキラキラした音を出すことで、フルーツの大きさの変化を感じやすくする工夫を行った。フルーツ達が小さくなったと同時に、子どもたちも好きなフルーツになりきってお皿に入る場面では、水色のロープを用意していたため、私たちも同じロープを使い、子どもたちと画面越しで会話をしながら一緒にお皿に入ることで、パネルシアターだけの止まった画面ではなく、私たちと楽しみながらフルーツになりきる事ができるように考えた。

　最後に、フルーツポンチにサイダーを入れる際、ただサイダーを入れるのを見せるだけでなく、想像しやすいようにシュワシュワする音を入れることを考え工夫した。カメラを全て使うことで、切り替えるだけでよかったためスムーズに場面の切り替えができた。

（執筆者：宮﨑未夢）

（4）音と音楽

今回は、リモートということもあり画面越しでの対話だった為音が届きやすいようにナレーションと登場人物と分け、ナレーションの声が子どもたちに届きやすいようにマイクを使用した。そうすることで声がハッキリと伝わり、会話もスムーズに行えた。
楽器とナレーションのマイクを別にすることで、音を鮮明に伝える工夫をした。
ナレーションも2人いたが、1人ずつ別のマイクを使い、周りの音が入りにくいようにした。
楽器は、ウィンドチャイムとオーシャンドラムを使用した。ウィンドチャイムは、「へんしんへんしんフルーツポンチ」とナレーションが言った後に効果音として付け、別のマイクで音を拾った。そうすることで、場面切り替えをすることができた。
オーシャンドラムは、フルーツポンチにサイダーをかける効果音として使用した。かける動作と同時に音を鳴らし、子どもたちが想像をしやすいようにした。
音を鮮明に伝えることで、子どもたちの集中力も途切れることなくタイムラグのストレスを軽減することができた。

（執筆者：吉田彩乃）

（5）　プレ幼教こども劇場における子どもの姿と省察

※子どもの姿を『シルエットクイズ、パネルシアター、博士』の３つの点でとらえた。

①シルエットクイズ・手遊び
・果物が出た瞬間、手をたたきながら答える子どもや真剣に画面を見ながら答える子どもがいた。みかんと柿でどちらか分からず周りの友達とコミュニケーションをとりながら答える子どもや、葉っぱの形の違いを気にする子どももいた。

・手遊び（ミックスジュース）
　1回目は画面を見ながら真剣に真似ていた。2回目は少しリズムを早くしたことで緊張感が取れ子どもたちも楽しんでいた。乾杯する際、保育者や友達と顔を見合わせて嬉しそうに「美味しい」と言っていた。

②パネルシアター
・果物の紹介をする際、スイカの目が怖かったり、可愛い果物が出てきたりして真剣に見る。果物が返事する声や返答が面白く真似をし楽しんでいた。
・好きな果物を聞かれてたくさん答える子どもや指で示しながら応える子どももいた。子どもたちは自分の好きな果物を聞かれて元気よく応えていた。
・フルーツポンチを作るために「大きいボールがいい」と応える子どもがいて周りの子どもたちも身体で表現した。

・果物の切り方を言葉で表現したり手を使って説明したりして楽しんでいた。友達の切り方を見ながら、納得したり意見を言ったり果物をどう切ってあるのかを楽しみながら知ることが出来た。補助の先生の反応を楽しんでいた。
・おまじないをかける時、手を使ってと伝えてないが子どもたち4、5人が手を使いながらおまじないをかけており周りの友達も手を使っておまじないをかけ楽しんでいる。
・部屋をボールに変身するが環境も画面も変わってないため変わった感じがなく「変わっていない」と言う子どもがいて、子どもたちが困っていた。
・果物になることで食べられてしまう事を気にしていた。

③フルーツ博士
・果物の栄養について真剣に話を聞きながら絵を見て学んだ。
・出てきた果物を振り返りながらシルエットクイズを楽しんだ。
・風邪をひかないように元気な体づくりを知る。

《省察》プレ幼教子ども劇場という事もあり、園側に送らなくてはいけないものや内容が準備不足だった。先生や子どもたちに沢山の部分で助けてもらったと感じた。主体が誰なのか子どもたちが表現しやすいような環境、声かけ、本番に向けて話し合いを進めて行った。

（執筆者：中島風花）

（6）取り組む過程での改善と工夫

当初の計画ではパネルシアターではなく本物の果物を使う予定であった。
しかし、本物を使うことで子供たちに断面図などどうなるのか見ることが出来るのでわかりやすいのでいいと思ったが予算面を考えると2回もするには厳しいということで急遽パネルシアターに変更を行った。1回目の幼教劇場ではパネルシアターだけで一緒に変身するおまじないを行うという場面や一緒にフルーツになり容器に入るなど口で言ってもわかりにくかったり伝わってなかったりしたため、２回目は1回私達が画面に出てきて変身するためのおまじないのお手本を行い変身するおまじないを一緒にすることに改善した。
また、容器を先生に頼んで持って行ってもらったり、おまじないに使うリボンを持って行ってもらったりと絵本の中に自然と入って行けるような改善ができたと思う。そうすることで子どもたちが色んなフルーツに一緒に返信してくれてとても楽しそうな様子を見ることが出来たためいい改善を行うことが出来たのではないかと思う。
工夫した点としては果物が変身を行う時にウィンドチャイムを使って変身しているような音を出すことを行った。
また、サイダーをフルーツポンチに入れる際のシュワシュワ感を出すためにシャボン玉をパネルシアターの所に吹く工夫も行った。その際に横からではなく下から吹くことによってよりシュワシュワ感をリアルに表現することが出来るように改善を行った。
また、フルーツポンチのパネルシアターを行うだけではなく博士が登場して果物の栄養についての工夫も行った。その時も事前に使っていた果物の絵やどこに栄養が付くのかわかりやすい絵を使ったり子どもたちにもわかりやすい言葉で伝える工夫も行った。

（執筆者：久冨真緒）

（7）幼教こども劇場での子どもたちの様子と省察

手首につけているリボンを見て、保育者や先生に「見て！リボン！」と嬉しそうに見せている様子が見られた。Aチームのフルーツシルエットクイズと手遊びでは、子どもたちがシル

エットを見て「りんごー！みかんー！」と元気よく答える様子が見られた。ナレーションが「すごい！美味しいよね」と子どもたちに問いかけると嬉しそうな顔をしていた。手遊びでは、画面を見て一生懸命真似をして楽しく友達と手遊びをしている様子が見られた。スピードアップをしたバージョンでも、楽しそうに身体や手を使って、歌いながらやっていた。乾杯する際も元気よく「乾杯ー！」と言い、飲む動作をしたり「美味しい！」などの表現を沢山していた。
Bチームのパネルシアターでは、フルーツの表現や形を見てお友達と会話をしている様子が見られた。好きなフルーツを聞いた際に、元気よく好きなフルーツを言ったり指をさして教えてくれる様子が見られた。大きいフルーツを小さくするためにどうしたらいいか聞くと、言葉で表現してくれたり手を使って「こーやってする！」と表現して教えてくれた。リボンをつけている手でおまじないをかける練習をする時から、大きな声でおまじないを言い、手を大きく使っておまじないをしている様子が見られた。また、ボウルに入る際に、好きなフルーツになりきって友達と楽しくボウルに入る様子が見られた。炭酸を表現するシャボン玉やおまじないに使った音に興味を持っていて、真剣にパネルシアターを見ていた。
Cチームは、フルーツの栄養について子どもたちにわかりやすいように説明した。子どもたちは真剣にフルーツの栄養について聞いていた。博士の問いかけやナレーションの問いかけにも答えている様子が見られた。フルーツの栄養についてで、血小板っていう言葉が難しく分からない様子だったので、もう少し工夫して言葉を変えればよかった。終わった際に子どもたちが「いっぱい話せた！楽しかった！」と保育者や先生に伝えていた。

（執筆者：熊川美麗）

5.取り組みを通して学んだこと、得たこと

【末岡　優佳】

まず、今回の幼教子ども劇場を通じての最大の学びは、保育者同士の連携の大切さである。大きな行事をしていく際に、小さな積み重ねの準備が必要である。準備をしていく際にも一人一人が役割を理解して積極的に全員が動いているのかを把握しなければならない。人任せにしてしまえば、グループでどのような内容・ストーリーにするのかを決めるのも偏りが出て、内容把握にも差が大きく出てしまう。そうなってしまえば、練習時間やリハーサルでもすれ違いが生じてしまい、なかなか話の内容がまとまらなくなってしまう。これらから、保育者同士が頻繁に話し合いの時間を設けたり、職員会議だけでなく少しの時間を見つけて保育者が他のクラスと情報共有をしたりしている意味をとてもよく理解することが出来た。

次に、実践の際の子どもの反応は、元気よく私達の声掛けに応えてくれたり、前のめりになってまで集中して聞いてくれたりしてくれていた。吉柳先生の私達が説明不足な所を補って下さった事で、子どもは話の内容をとても理解しているように見受けられた。

話の内容をもう少し統一して話をもっと簡潔に出来なかっただろうかと振り返って考えた。保育者になったら客観的に内容を見つめ直すことを大切にしたい。

【中島風花】

子ども劇場を通し、グループで動くことの大変さや大切さを学ぶことが出来た。私は人に意見やアイディア、自分の考えを伝えるのが苦手です。仲の良い人にしか言えなかった自分が嫌いでした。焦っていた私はパニックになりグループに迷惑をかけてしまった。グループの人と話し合いをした事で伝え方伝わり方それぞれの価値観を学んだ。状況を把握するためにはグループでの話し合いがとても大切で1人でする訳ではないので協力することも必要

でした。私はこのことから、一人では出来なかったこともグループの人やその時の環境があることで私の苦手な部分を少しずつ変われる一歩になったと思います。保育者になってからも自分の意見、意思を表に出す事をわすれないでこれからも成長につなげていきたいと思った。

【矢ヶ部 礼姫】
　今回の幼教子ども劇場を通じての最大の学びは情報の共有と助け合いである。1つ目の情報共有の部分ではひとつの作品を作る上で各々の個性を大切にしながら、作品を作っていくため思いや作品の方向性の違いが出てきてしまっていた。そのため、常に方向性を合わせるため情報の共有をしながら作品を作っていく事が必要だ。
　2つ目の助け合いの部分では、悩んだことを相談をし、他者の意見を取り入れながら作成していくことで、より良い共有した作品ができる。
個人で解決しようとするのではなく、他者の意見を聞くことで固まった自身の考えを崩すことが出来る。助け合うことで各チームの考えを一つにすることができ、より内容の詰まった作品ができる。
　この2つの気づきから他者の意見を聞いたり、情報の共有を大切にすることで小さな気づきを見つけることができ他者の理解、また作品を作る上での協力の必要を感じた。そのため、今後の考え方として他者の意見を学びとして考え、情報の共有を常にすることを今回学び、大切にしていきたい。

【宮﨑 未夢】
　今回の幼教子ども劇場を行い、学んだことは、協力することの大切さだと思った。それぞれが役割を持って活動を行っていたため、誰か1人だけが内容を把握していても、パネルシアターを行う人に伝わってなければ、スムーズにいかないし、全体で情報を共有する事が大切だと感じた。そして自分の考えをしっかり持ち、人任せにするのではなく、意見を伝えることでもっといい物が出来上がると感じた。私たちの考えたパネルシアターは時間がとても長かったため、どうしたら子供たちの集中力が持つか悩んだ。何度も実践していく中で、この場面はパネルを使わずに、私たちと子供たちでやり取りをしようなど、できるだけ同じ画面でパネルがそのままという事がないように考えることが大変だったが、私たちのグループは人数も多かったため、それと同じくらい考え方もそれぞれで色々な案が出て、自分1人では思い浮かばなかったことも協力することで、色々な視点から考えることができた。保育は個人で行うより、周りの人達と協力することが大切だと思うので、今回の経験を活かして、保育現場でも活動したいと感じた。

【吉田 彩乃】
　準備の過程では、あまり全体的に通す時間がなく1番最初の実践では連携が上手く取れず予想外のことが起こったりした。その経験を活かし、本番に向けて沢山の通し練習を行ったり、実際の子どもたちの反応を見て声かけや言葉選びを考えたりもした。子どもたちにどう伝えると分かりやすく飽きずに話を聞いてくれるかなど、グループ内で沢山の話し合いを重ねた。
　話し合いの場面では、こうしたら良いと思うなど沢山意見がぶつかり合うこともあったがそれも踏まえて本番ではとても良い作品が作れたと感じた。
また、実際にやってみて想像していた答えと違う答えが出た時の保育者の声かけの対応性なども重要だと感じた。想定していないことが起きた時の対応力なども身につけていかなければならないと思った。
　そして今回の幼教劇場を通して、保育者同士の連携や協力が大変重要になってくると感じた。1人で作品を作ろうと思ってもなかなかできないし保育者同士の連携が必要になってく

ると思った。その為にも子どもたちの様子の情報共有を行ったりすることが大切だと思った。今回の経験を活かし、今後の現場でも活かしていきたいと思った。

【久冨真緒】
　今回の幼教劇場を通して学んだことは一人一人がしっかりと意見を伝え合っていくことの大切さです。一人一人が意見をしっかり持ち話し合いを行う上でどうしたら良いのかなどいいアイディアがでるため1人に伝えるのではなく全体に意見を言い合うことが大切と思った。チームワークがとても大切で何をするにもひとりでは決してできないし周りの助けがとても必要だなと感じることが多かった。最初考えていた事と大幅に変わった班だったけれどパネルシアターを通して団結することができたのではないかと思った。保育士にとってコミュニケーションがとても大切なので今回の幼教劇場はそれに近い形で色々と制作など考えたがやはり難しいと思った。一人一人が意見が違う中でどうまとめていくと良いのかなど学ぶことが出来ました。たくさん意見が合わないことがあったけれど最終的には子供たちの喜ぶ姿を見ることが出来たのでよかったです。大成功だと思います。幼教劇場を通して沢山学ぶことが出来たしいい経験を行うことが出来たなと思いました。

【田邊万音佳】
　全体の反省として今回の大谷劇場の課題と評価として私が考える基準は、保育の現場に行き報告連絡相談を行うことの大切さや意見を出しお互いの意見を尊重しながら皆で考えひとつのものを作るということが課題だったと思う。
だが、今回メンバーを決める際に計画を立てずに決まったことで連携がとれなかったり、対等に意見を出し話をするということが上手く出来なかったためスムーズに行かない部分もあった。
　しかし、決まってしまったら最後まで仕事を放棄せずやり通すということも課題だと思ったためフォローしながら最後までやり遂げた。
私たちはもう少しで卒業し、働く中でこの人と合わないから仕事をしないということはそう簡単には行かないし子供を主体とする職業であれば自分の私情で子どもを振り回してはいけないと思う。
　なので今回学んだ事、人の話を聞くまずは協力していく仲間と関係を作るという所を大事に活動を取り組みたいと思った。
　この大変だった経験はきっとこの先の人間関係や協力という部分に繋がると思うためこれからもそう思った自分の心を大切にしていきたいと思う。

【熊川美麗】
　今回の幼教子ども劇場を行ってみて、学んだことは、チーム全体の連携と計画性と協力性がとても大切だと感じた。準備の過程では、途中でグタグタになってしまい、準備物の用意や全体の練習があまりできなかったので、そこが反省点だと思った。まどかがうまく全体をまとめてくれたので、それぞれ練習ができ、おかげで本番ではしっかり全部通すことができてうまくやれたのでよかったなと思いました。何かを行うことで、ハプニングなどはおこるのでその対処の仕方や、チームでどうするか話し合うことがこれからの人生にも大切だと思った。
　保育士になり、これから人間関係や行事の計画、沢山することがあります。今回の幼教子ども劇場で色んなことを学べたので、保育士になり働き始めたら今回の経験を活かしていきたいと思いました。幼教子ども劇場での、子どもの反応が可愛かったし、色んな表現をして伝えようとしてくれたので嬉しかった。
　みんなでひとつの作品を完成させることで、達成感を味わうことができた。子どもたちにもそのような経験をしてもらえるような活動を計画したいと思った。

【執行梨沙】
　まず、チーム内で情報共有をすることの大切さである。情報共有が上手くいっていないと1人で勝手に物事を進めようとしたり、情報の伝達不足により行き違いが起きたりなどロスが起きることがあったためスピーディーに物事を進めて行くには情報共有を怠ることで起こるロスを未然に防ぐことが重要だと感じた。
　次に、疑問に思ったことは質問して確認することである。人の考え方は人それぞれなため話し合いなどで意見を交換し合うことで新しいアイデアなどが浮かぶことがあったからだ。
　そして、助け合いができていなかったことである。初期の段階でチーム分けを行ったこともあったため、自分のチームだけで精一杯になってしまい他のチームを手助けすることが出来なかった。そのため情報共有する際も把握することに時間がかかっていた。